

アジアの民族服に関する被服造形学的研究

—文化学園服飾博物館所蔵品の分析調査—

荒井 やよい* 田村 照子**

A Study on Clothing Construction of Ethnic Costumes in Asia —An Analysis of the Collection of Bunka Gakuen Costume Museum—

Yayoi Arai and Teruko Tamura

要 旨 文化学園服飾博物館所蔵のアジアの民族服について、実物資料の分析調査を行った。袖の構造に着目し以下の4点を選んだ。①インドの上衣、ケリヤ。②イランの上衣、ジレット。③トルコのブラウス、ギョムレク。④トルクメニスタンのドレス、コイネク。各資料の形状、パターン、裁ち合わせ、縫製方法、装飾技法について調査し、試作服の製作、並びに着装実験によって上肢の運動機能性を評価した。各資料の素材はインドが綿、他の3点は絹で、布幅は32cmから70cmであり、いずれの資料も布地を無駄にしない、布幅を最大限生かしたパターン、裁ち合わせになっている。縫製は、全て手縫いが3点、手縫いとミシンの併用が1点で、装飾の刺繍は緻密かつ正確で補強も兼ねている。4点共水平袖であり脇下に襷を付ける、脇下を開口する、脇布と内袖布を繋げて上挙の形態で構成する等上肢を上げ易くするための運動量確保の工夫がなされ、着装実験で運動機能性が確認できた。アジアの民族服はゆとりの多い寛裕型、平面的で許容範囲の広い形態が多く、様々な形状の襷を活用し運動機能性を高め、日常のあらゆる姿勢、動作に対応させていることが明らかとなった。

キーワード 民族服 アジア 裁ち合わせ

I はじめに

民族服は気候風土、地域文化、生活習慣に根ざして構成され、隣接する地域に影響を与え合い、長い期間に定着し着用されてきた。生活様式の近代化に伴い、衣服においても世界的に洋風化が進み、民族服を着用する機会が減少傾向にある。同時に、時間をかけた繊細な手仕事が廃れて技術の伝承が途絶えつつあり、現在、それらの収集、保存、記録、資料作り等が急務となっている。今回文化学園服飾博物館所蔵の貴重な実物資料に触れ、詳細に調査する機会に恵

まれた。インド、イラン、トルコ、トルクメニスタンのアジア4カ国より民族服4点を選び素材、形状、パターン、裁ち合わせ、縫製方法、装飾技法、機能性など服装造形学の視点から考察を試みた。既にアジアの民族服については多方面からの研究がなされている。実物調査の実地調査研究ではタイ、カレン族¹⁾、タイ、ラワ族²⁾の民族服について、またインドネシア、ジャワ島の民族服³⁾、ブータンのゴーについて⁴⁾の研究がある。博物館資料の調査研究では、東アジア、東南アジア8カ国の12着を対象に構成学の見地から考察したもの⁵⁾、民族服の裁ち合わせ、デザインと布幅についての報告⁶⁾等がある。本研究では袖に形態的特徴のある4点の分析調査を行い、得られたパターンより試作服を製作、着装実験により上肢の運動機能性につい

* 本学教授 被服構成学

** 本学教授 被服衛生学

て検討した。その結果を報告する。

II 研究方法

1 調査対象

調査した実物資料は、文化学園服飾博物館収蔵品データベースより検索し袖の形状に特徴のある上衣3点及びドレス1点、合計4点である。資料Aはインドの男性用上衣、ケリヤ(1970-80年代)、資料Bはイランの女性用上衣、ジレット(19世紀)、資料Cはトルコの女性用ブラウス、ギョムレク(19世紀末-20世紀初め)、資料Dはトルクメニスタンの女性用ドレス、コイネク(20世紀後半)で、以上4点共アジアの民族服である。

調査は素材、形状、パターン、裁ち合わせ、縫製方法、装飾技法について行った。

1) 素材

資料の織組織、糸密度(たて×よこ本/cm)についてはマイクロスコープにて撮影した拡大写真より観察、計測した。厚さ(mm)はスプリングマイクロメーターを使用した。重量については電子天秤を使用、衣服の全体重量を計測するとどまった。素材(材質)は文化学園服飾博物館作成のデータを使用した。

2) 形状、パターン

各資料の形態、構成、特徴を観察した後、その構成パターンの分析を行った。まず、資料全体の外形を把握するため、テープメジャーを使用して、着丈、衿丈、胸幅、裾幅の寸法を計測した。次に、各構成パーツのパターンを採取するため、パーツを出来るだけ平面に付置し、その形状を写し取ると共に要所を採寸した。左右に差のある場合は寸法調整を行った。

3) 裁ち合わせ

裁ち合わせ図を作製するために、資料中の両耳を含むパーツより、使用された布の布幅を計測した。その布幅上に、パターンを出来るだけ近接した状態に付置したものを裁ち合わせ図(推測)とした。

4) 縫製方法、装飾技法

資料の中に使用されている全ての縫製部分並

びに装飾部分を対象とし、縫製方法、装飾技法を観察、調査し記録をとった。

2 試作服による運動機能性評価

1) 試作服の製作

各資料の運動機能性を評価するため、資料A BDは綿100%の線入りシーチング及びカラーシーチングを用い、また、資料Cはブリーツ加工をする為ポリエステル100%の薄地を用いて、実物大の試作服を製作した。

2) 着装実験

被検者は各資料着用可能な成人男子(54歳、身長175cm、体重72kg)、成人女子(23歳、身長164cm、体重48kg)である。各被検者に試作服を着装してもらい、上肢側挙、前挙、上挙の一連の動作中の着装感、着くずれ等を観察した。

III 結果及び考察

1 素材

A~Dまでの資料の諸元を表1に示す。

1) 資料A インドの上衣ケリヤ(図1)は綿100%、たて、よこ共太目の糸2本セットでざっくり織られている。布幅は58cm、厚地であり、その衣服重量は702gで調査資料中最大の重量であった。インド(ニューデリー)の平均気温(表2)は14.2℃(1月)~33.5℃(6月)、最高気温は40℃(5月)にも達する。湿度は30~75%と高温多湿である。厚地でゆとりの多い衣服は、直射日光を遮蔽し外部からの熱の進入を防ぐとともに体に密着せず、衣服内の空気が流動しやすい。厚地の衣服は外気温が体温より高い場合、伝導・対流による熱の侵入を防ぐ役割を果たすと考えられる。

2) 資料B イランの上衣ジレット(図2)は絹100%の朱子織である。光沢のある上品な風合いがデザインと合っている。裏布には平織の綿100%を使用している。衿仕立ての為、各布地の厚さは不明であり、布幅も確認出来なかった。

3) 資料C トルコのブラウス、ギョムレク(図3)は薄手の絹地で、織り幅の両端に緋縞

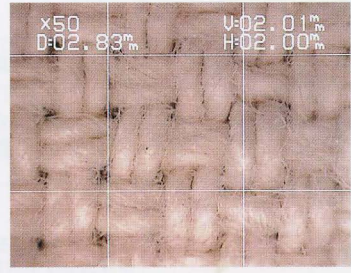


図1 資料A インド,ケリヤ (文化学園服飾博物館所蔵)

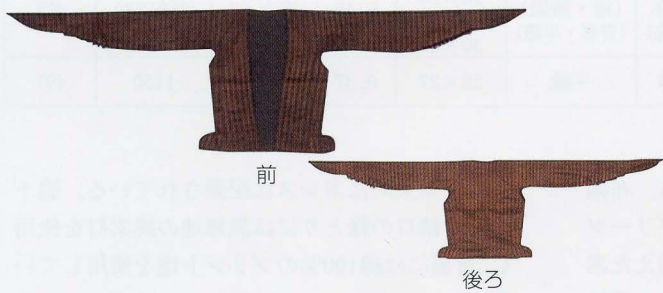


図2 資料B イラン,ジレット (文化学園服飾博物館所蔵)

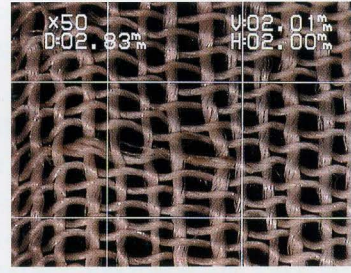
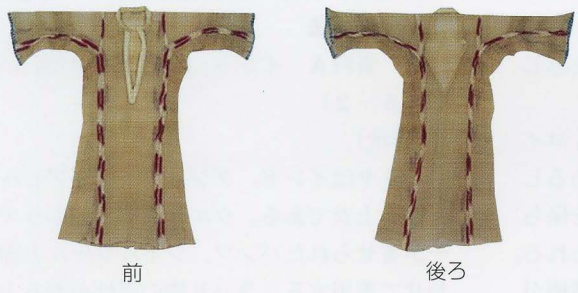


図3 資料C トルコ,ギョムレク (文化学園服飾博物館所蔵)

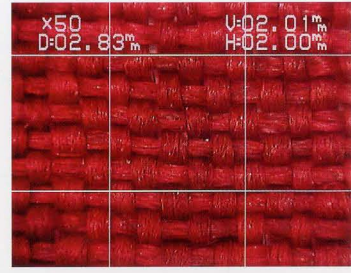


図4 資料D トルクメニスタン,コイネク (文化学園服飾博物館所蔵)

表1 資料の諸元

資料	国	服種名称	素材 (%)	織組織	糸密度 (本/cm) たて×よこ	厚さ (mm)	布幅 (cm)	使用量 (cm)	衣服重量 (g)
A	インド	上衣 ケリヤ	綿 100	平織	21×21	0.91	58	440	702
B	イラン	上衣 ジレット	絹 100 (裏布・綿)	朱子織 (裏布・平織)	表布 125×40 (裏布) 30×30	---	表布 70 (裏布 70)	200 (裏布 120)	322
C	トルコ	ブラウス ギョムレク	絹 100 (衿・綿)	平織 (衿・平織)	表布 25×40 表布併 25×45 (衿) 25×25	0.39	表布 38	表布 570	168
D	トルクメニスタン	ドレス コイネク	絹 100 (襦・綿) (背裏・綿)	平織 (襦・綾織) (背裏・平織)	表布 26×25 (襦) 30×40	0.46	表布 32	表布 780	377
参考	日本	長着 浴衣	綿 100	平織	28×27	0.37	36	1150	497

を配した、空隙の大きい粗い平織である。布幅は38cmで、織り上がった布にランダムプリーツが施され高高度伸縮性のある機能性を備えた素材に加工されている。素材の凹凸は体への接触面が少なく涼しく感じられる。プリーツは、糸で縫い縮めてセットしている跡が確認できた。ただ縫い縮めるのではなく、シルエット出しをしている点にデザイン性、技術性の高さを感じた。

4) 資料D トルクメニスタンのドレス、コイネク(図4)は絹100%の平織で、張りのあるしっかりした風合いがドレスのシルエットを保ち適度な張りは体に密着せず涼しいと考えられる。布幅は狭く32cmで織り幅の両端に縦縞の織柄が通っている。発色の良いオレンジ色と黒が交互

に並び効果的にドレスに配置されている。脇下の襦、袖口の縁とりには黒無地の綿素材を使用し、背裏には綿100%のプリント地を使用している。

2 形状、パターン、裁ち合わせ、縫製方法、装飾技法

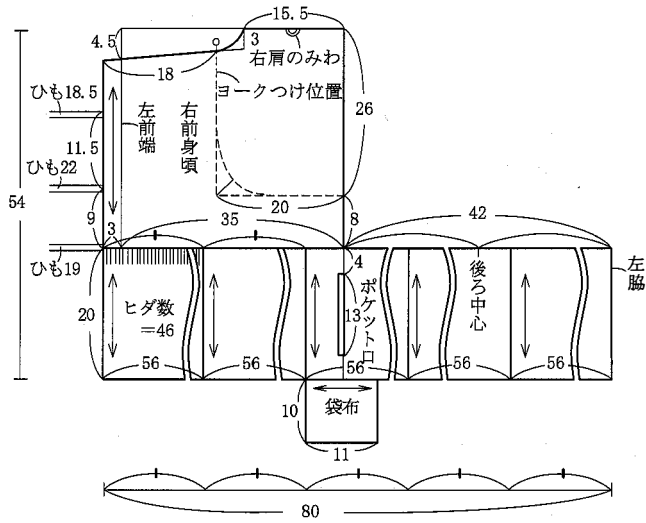
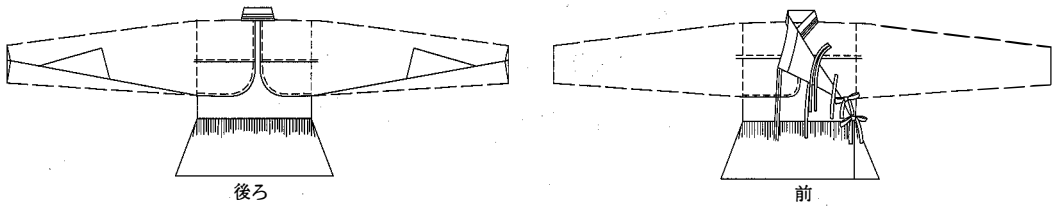
1) 資料A インド;上衣,ケリヤ(図5-1, 5-2)

[形状]

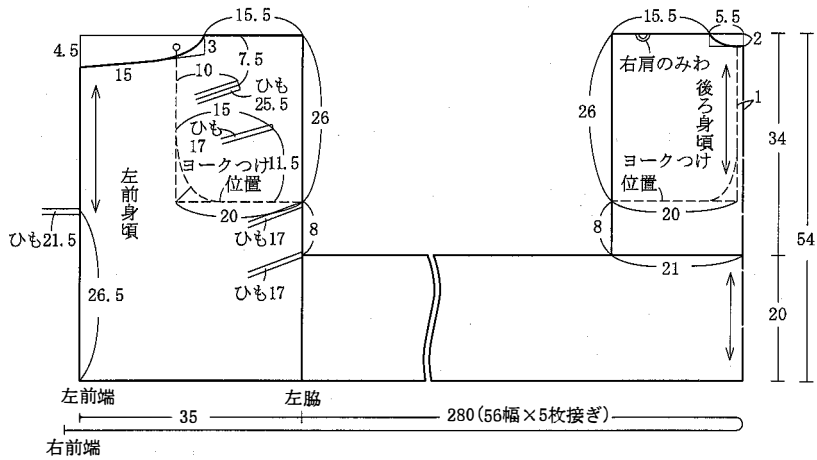
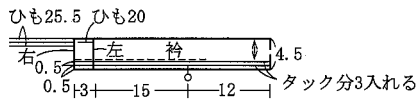
ケリヤはインド、グジャラード州アヒル族の男性の上衣である。ウエストにたっぷりギャザーが寄せられたパンツ、シャルワールと組み合わせて着用する。ラバリ族の男性が着る上衣ケリヤと同様にハイウエストでの切り替え、裾布

表2 資料該当国首都の気温と気候

気温(℃)	インド・ニューデリー	イラン・テヘラン	トルコ・アンカラ	トルクメニスタン アシハバード	日本・東京
最高(月)	33.5(6)	30.0(7)	22.9(7)	30.9(7)	27.1(8)
最低(月)	14.2(1)	3.1(1)	0.0(1)	2.0(1)	5.2(1)
気候	熱帯モンスーン気候 夏高温多湿 夏多雨、冬乾燥 北部穏やか、南部亜熱帯	大陸性気候 夏高温多湿 乾燥砂漠	沿岸冷涼多湿 内陸高温乾燥冬寒冷	大陸性気候 降雨なく乾燥 夏暑く冬厳寒	温帯気候 温暖湿润 夏湿冬乾



右前身頃・ペプラム



左前身頃・後ろ身頃・衿

図5-1 インド、ケリヤの作図

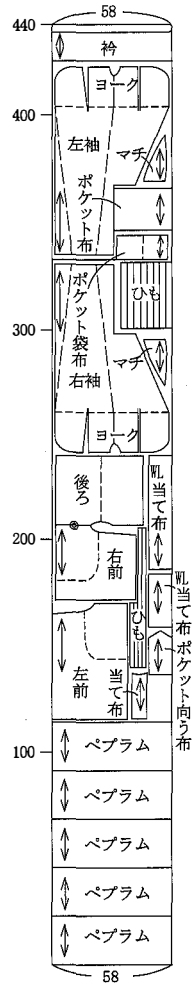
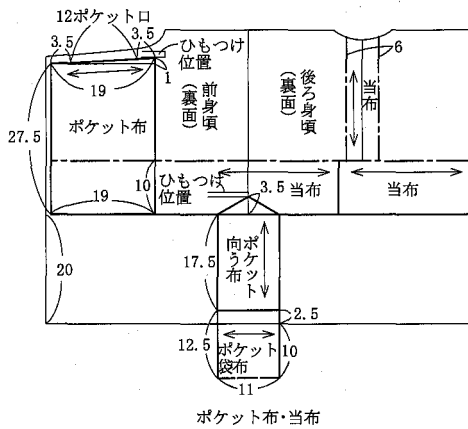
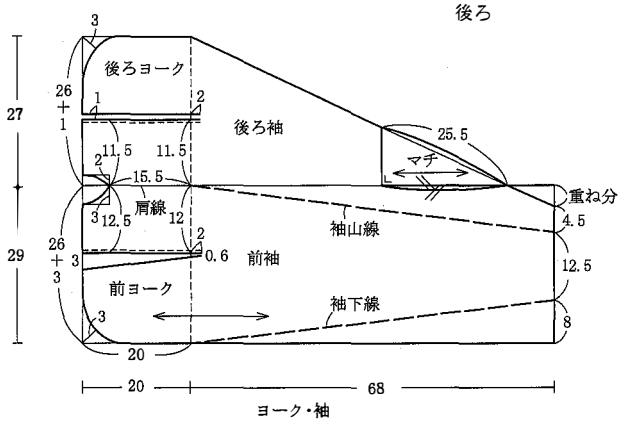
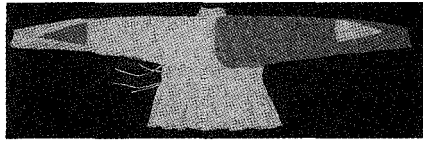


図5-2 インド、ケリヤの作図、裁ち合わせ図

表3 インド、ケリヤの縫製

A	インド 上衣 ケリヤ	<p>一手縫い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペブラム布5枚=布幅57が46に分割され1ひだ分1.2強、表ひだ幅0.35で規則正しくギャザーが寄せられている。1パネルの出来上がりウエスト幅16、耳端より0.5の縫い代、並縫いでペブラム5枚を縫い合わせる。ひだは飾りステッチで固定する。【スモッキング技法、ひだをフェザー・ステッチで飾り刺し同時に固定する。】 ・ヨークスリーブ=前後ダーツを並縫い、縫い代を上側に片返して押え縫い、後ろ袖に三角褶を付け縫い代を袖側に片返し押え縫い、袖下縫いでは肘位置から袖口にいせ分6.5はいる。【肘でのいせ分は肘の曲げに対応する。】 ・脇縫い肩縫いをしペブラムを右上前から後ろ身頃につける。【左下前は薄く仕上げ上げるためペブラムは省く。】 ・ヨークスリーブを身頃にのせ折山より0.3と1.3の2本の半返し縫いでつける。【半返し縫いはしっかり丈夫】 ・右前身頃裏面には30×21の共布の当て布がつき上側12は縫いあけられポケットの役目もする。後ろ身頃にも後ろ中心とウエストに当て布がつけられている。【当て布でヨークつけの縫い目ペブラムの裁ち目が隠され裏面側からも綺麗、着装で右上前は折返り裏面が見える為の配慮、同時にほつれ止めと補強も兼ねる。】 ・ウエスト位置ペブラム縫い代、身頃、当て布を通して折山より0.3と2.3の2本半返し縫い【飾りと補強を兼ねる。】 ・衿作り、衿つけ=3のタック分量で2本のタックが押え縫いされる。衿つけ側は布幅いっぱいを使用し衿先両サイドは耳を使用。【衿両サイドに耳を使用する事で地厚な布地を薄く仕上げる。】 ・ポケット作り=袋布を右脇ペブラムに中表に合せポケット口13でスラッシュあきを作る袋布両サイドを縫うポケット向う布を袋布につけ向う布の周囲を折ってペブラムにまつ。 ・ひも作り、ひもつけ=51~17の12本のループ状のひもをつくり身頃衿につける。右上前衿つけ下には3のうき分が出来るように最上ひもつけ位置はずらしてつける。【前身頃の打合せ分量が多くクロージャーがひもであるためサイズでの許容範囲が広い。30cm間に4本のひもはデザインのインパクト有たっぶりギャザーのあるペブラム分量に対しバランスが良い。】
---	------------------	--

(ペプラム)の細かなひだ飾りが特徴的である。裾布(ペプラム)は5枚のパネルで構成され、1パネル45本のひだは、5パネル全体で225本になる。この細かなひだは緻密で丁寧に正確によせられスマッキングの技法でまとめられている。華やかな装飾であるが男性の日常着である。身頃の前の合わせは深く4箇所を紐を結ぶことで閉じるが、着装ではハイウエストの切り替え位置の紐のみ結ぶか、またはその上まで結ぶことが多い。衿に付いた紐まで結ぶことは少なく、右前身頃が衿付け位置から折返るルーズな着方がされているが、前身頃の深い重ねはこの着方を可能にしている。紐でのクロージャーはサイズのカバー量がやや広い。折返る右前身頃は二重になっており、当て布の上部は内ポケット状にあいている。左下前最上の紐付け位置を3cm下に移動することで、紐を全て結んだ場合、右上前に浮きが出来よう設計されている。これは、右上前の内ポケット状に物を入れた状態に対応する。

[パターン、裁ち合わせ、縫製方法、装飾技法]

裁ち合わせ図を図5-2に示す。ケリヤは30パーツからなるやや複雑な構成、身頃の上にヨークが重なり、肩から胸は二重構造となっている。袖はヨーク続き(ヨークスリーブ)であり単純ではないため、雛形で確認しながら作図に起した。肩先から袖山線が7度の傾斜角度で肩線より続く。袖下線は縫い目ではなく折山になり、袖下線より下の部分は後ろ袖にまわる。後ろ袖は肘の位置で三角形に切り抜かれ、袖幅方向にふくらみを持たせた三角形の襻を当て、縫い付けている。資料を表から見ると、三角布は肘当て、つまり肘部が2重になっていると考えていたが、裏面から見て三角形の襻であることが分かった。三角布のふくらみ分は肘ぐせで曲げる動作へ対応している。また縫い目線の寸法差は6.5cmもあり、いせることで肘ぐせを構成している。袖はやや細めでフィット性が高いが肘ぐせを考慮した構造布が入れられ見た目より動きやすい構造が工夫されている。耳の使用箇所および布目方向の調査記録に忠実にパターンの

表4 資料の概要

	A	B	C	D
国名・地域	インド	イラン	トルコ	トルクメニスタン
民族・部族	アヒル族	バクチアリ族		トルクメン族
地域	南アジア	西アジア	西アジア	中央アジア
服種	上衣男子	上衣女子	ブラウス女子	ドレス女子
名称	ケリヤ	ジレット	ギョムレク	コイネク
材質	綿(平織)	絹(朱子織)	絹(平織) 緋(経緋)	絹(平織)
年代	1970-80	19世紀	19世紀末~ 20世紀初め	20世紀後半
形態	前開型	前開型	貫頭型	貫頭型 長裾寛衣
身頃、衿の特徴	スタンドカラー ウエスト切替え ペプラムにタック 前結び紐留め	衿無し 前留め無し 特.前襟、裾に縁とり	スタンドカラー 前短冊あき 縞柄の配置 プリーツ加工	スタンドカラー 前スリットあき 前結び紐留め 縞柄の配置
袖の特徴	水平袖(7°傾斜) ヨークスリーブ 肘に楔型襻	水平袖 脇下開口 肘下ループあき すず釦	水平袖 脇、内袖繫ぎ	水平袖 脇下三角襻
寸法	着丈 54 衿 89.5 裾幅 140	着丈 52 衿 95 裾幅 50	着丈 108 衿 54.5 裾幅 64(76)	着丈 133.5 衿 73.5 裾幅 88
パーツ数	30	29	5	16
裁断法			直線裁ち	直線裁ち
表布使用量	58cm 幅 440cm	推定 70cm幅 200cm	38cm 幅 570cm	32cm 幅 780cm
縫製	手縫い	手縫い	身頃袖手縫い 衿ミシン縫い	手縫い
装飾	タック スマッキング 紐	縁とり すず釦	プリーツ オヤレース	刺繍 縁とり 襻

配置を試みた。布幅をいっぱい活用することが裁断の基本となっている。パターンの殆どに耳が存在するため、パターン配置も布幅の計測も容易であった。使用量は58cm幅×440cmとなった。残り布は殆ど無く布地の有効活用がなされている。縫い代は1cm弱の全て手縫いで、太目の糸でざっくり縫い合わされている。縫い代は折り伏せて、押え縫い又はまつり縫いで処理されている。縫製の詳細は表3に、資料の概要を表4に示す。

2) 資料B イラン; 上衣, ジレット (図6)
[形状]

イラン, バクチアリ族の上衣で, タイトフィットしたウエストと手の甲まで覆う長い袖が特

徴である。脇下のあきで上肢の運動機能が処理されている。ウエスト部の張り出しは下衣のゆったりしたパンツのためである。細身の袖下は脇下のあき、肘から袖口にかけてのループあき、袖口からさらに折り返し分(裁ち出しカフス)へと続く。着用では袖が広がらないように、肘下で細帯を巻いて留める。脇下のあきから中着のブラウスを覗かせるデザインとなっている。前端的な深いVゾーンから裾、ウエストの横張と袖折り返し部分に縁とりの装飾が施されている。

[パターン, 裁ち合わせ, 縫製方法, 装飾技法]

裁ち合わせ図を図6に示す。表布は29パーツからなるやや複雑な構成である。西洋の衣服構成を思わせるデザインではあるが、胸ぐせ等の凹凸感はなく和服のような平面構成となっている。右脇布は前後共、ヨコに3分割され、左脇布は前後共、鋭角の三角布とその残り部分の2つからなる。いずれも、たて縞を通した柄合わせで、遠目からは切り替え線が見えず、1枚続きの布に見える。布地の節約の為に切り替えかと思えたが、パターン配置を始めてみると、脇布を小さなパーツに分け、柄を合わせて一つ一つに縫い代をつける必要があるため、結果的に、布地の節約にはつながらず、なぜこのような切り替えをしたかについては疑問が残る。布幅は、袖のパターンを基準に65~70cm幅に想定してパターン配置をした結果、使用量は70cm幅×200cmとなった。袖口のループあき部分は裁ち出し見返しで袖下線の延長が見返し端になり、合理的に裁断できる。三角に折り返した折山に2cm間隔で右は10個、左は11個のすずの飾りボタンとループを付けて開閉寸法を小刻みに変更できる、装飾と機能を兼ねたデザインである。袖口の裁ちだしカフスは折り返しが簡単に出来る形状で、折り返さず長くしたままの着用も可能である。袖下側を大きなカーブでカットすることで、斬新さと運動機能性を持たせている。全て手縫いで仕上げられ、身頃、袖ともに裏布がついていて切り替えの多い身頃、切り替えのある袖の縫い代を隠している。裏布パターンは切り替え線を省き、身頃、袖それぞれ1枚のパターンになっ

ている為、縫い代がかさばらず、作業時間も省略できる。袷仕立ての裏布のとは、前身ごろは前端から7cm前後の位置に、後ろ身頃は中心線と中心から左右11cm前後の位置に、表の縞柄に合わせ、目立たないように肩から裾まで細かな針目で止められている。前端、裾、脇の横張り布、袖口に縁とり布が縫い付けられさらに表面から細かい針目で押え縫いされ、丈夫さと装飾を兼ねた縫製となっている。縫製の詳細は表5に示す。

3) 資料C トルコ;ブラウス,ギョムレク(図7-1, 7-2)

[形状]

トルコのブラウス、ギョムレクは全体にプリーツ加工が施された薄地の絹で、布両端は赤とクリーム色の緋織りになっていて、華やかで、軽やかなブラウスである。ウエストは少し絞られ、裾は広げられたシルエットに仕上げられている。袖口はやや広がったトランペットスリーブで、別布で構成されたスタンドカラーと短冊仕立ては今風である。袖口は紺とクリーム色の糸で、裾は赤と青の糸でオヤレースの飾りが施されている。資料Cは中着として着用されたものである。

[パターン, 裁ち合わせ, 縫製方法, 装飾技法]

裁ち合わせ図を図7-2に示す。前後身頃、右脇、左脇、右外袖、左外袖の5パーツからなる。前後身頃は続け裁ちで肩線は輪である。また、内袖布と身頃脇布も一繋がりになっている。袖は2枚袖になっており外袖が袖丈40cmで裁断されている。図が示すように最も単純な裁断となっている。使用量は38cm幅×570cmである。裁断された各パーツはシルエットを形作るためプリーツが寄せられ、それぞれ計画された寸法に縮められセットされている。資料に糸を通した跡が残っていることから、絞りの要領でプリーツ加工が施されたと思われる。裁断された布は作図(図7-1)のように長方形であるが、プリーツ加工されたパーツはプリーツ縮み寸法(図7-2)のような形状に形作られる。加工後、巻き縫いの縫合法で縫い合わされ、丈夫である

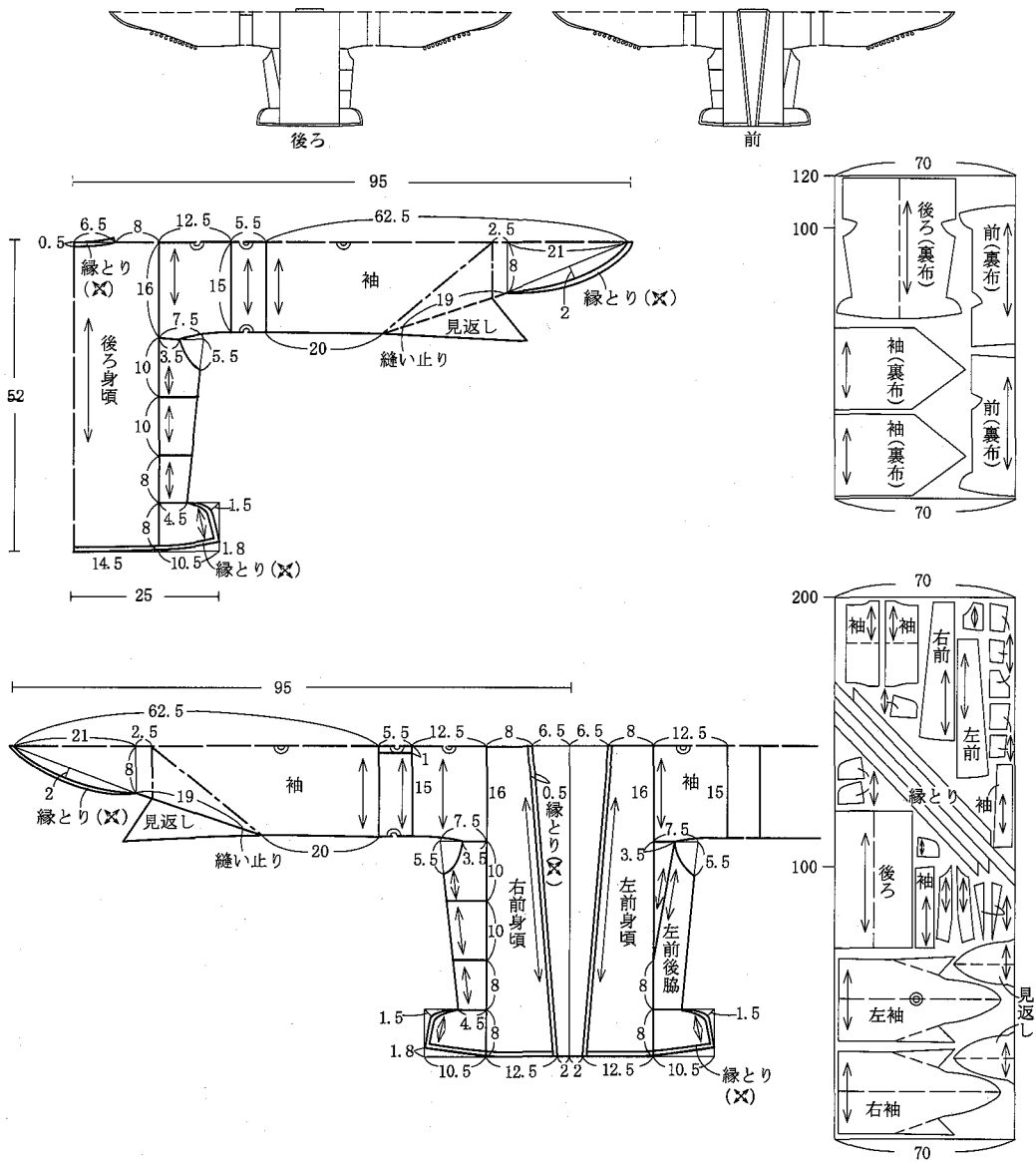


図6 イラン、ジレットの作図、裁ち合わせ図

表5 イラン、ジレットの縫製

B	イラン 上衣 ジレット	<p>—手縫い、装飾(縁とり)—</p> <p>・前後脇布作り=4分割された右脇布接ぎ、3分割された左脇布接ぎ。【右脇は前後共よこに切り替え線左脇は左右共たてに切り替え線が入り細かく分割し裁断では縦縞の柄合わせをしている。裏布の切り替え線は省かれ裁断されている。】</p> <p>・上側袖布を脇布につける。【上側袖の袖下はゆるやかなカーブで構成されあきの処理がされた特徴的な袖つけになっている。】</p> <p>・肩縫い。 ・前後身頃に脇布と上側袖布を縫い合わせる。 ・縁とり布を衿ぐり、前端、裾、脇に止める。</p> <p>・裏布(木綿)を身頃に合わせ中とじをする。 ・脇縫い=表布脇縫い、裏布脇を整えまつる。</p> <p>・袖作り=中側袖布筒状に縫う、袖口に見返し(別布)をつけ0.5ふきださせ整え縁とりにする、袖下縫い目を縫う、袖下あき部分の裁ち出し見返しを整えまつる、中側袖と下側袖を縫い合わせる。</p> <p>・袖つけ=上側袖と中側袖を縫い合わせる。 ・裏布を整えまつる。 ・袖下あきにボタンつけループつけ【必ずボタン左11個右10個ついている左右のボタンの数が異なる。】</p>

が、時間のかかる根気の要る作業である。耳どし縫い合わされた部分では2本の縞柄が構成される。袖付け線のみは1本縞、他の部分は2本縞になりデザイン効果を上げている。衿と前立ては別布で裁断されミシン縫いで仕立てられているが、他の部分の丁寧さに比べ雑に縫われており、ミシン縫いにおいては技術的に未熟さが感じられる。機器が問題なのか、また不慣れなのか、別の手が入ったのか、後にリフォームされたのか疑問が残る。縫製の詳細は表6に示す。

4) 資料D トルクメニスタン; ドレス, コイネク (図8-1, 8-2)

[形状]

布地の織り端両サイドの縞柄を生かしデザインされたドレス。地色の濃いエンジ色に鮮やか

なオレンジ色と黒の縞が耳端近くに織り込まれている。左右の柄いきを変えることで型入れがスムーズで布地の無駄がなく効率よく裁断できる。デザイン的にも、アシンメトリーな構成は変化があり、動的で、優雅な感じ、モダンな印象を与える。袖下に、手を上挙しやすいよう黒の無地を使用し、三角形の襻がはめこまれている。襻と同じ布を使用して袖口に縁とりが施されている。衿は1.5cmの低いスタンドカラーである。衿ぐりから前中心あき周囲に繊細なダブルチェーン・ステッチの刺繍がブレードののせたように刺されている。衿元に大きな金属の飾りをつけて装着する。

[パターン, 裁ち合わせ, 縫製方法, 装飾技法] 裁ち合わせ図を図8-1に示す。この資料は

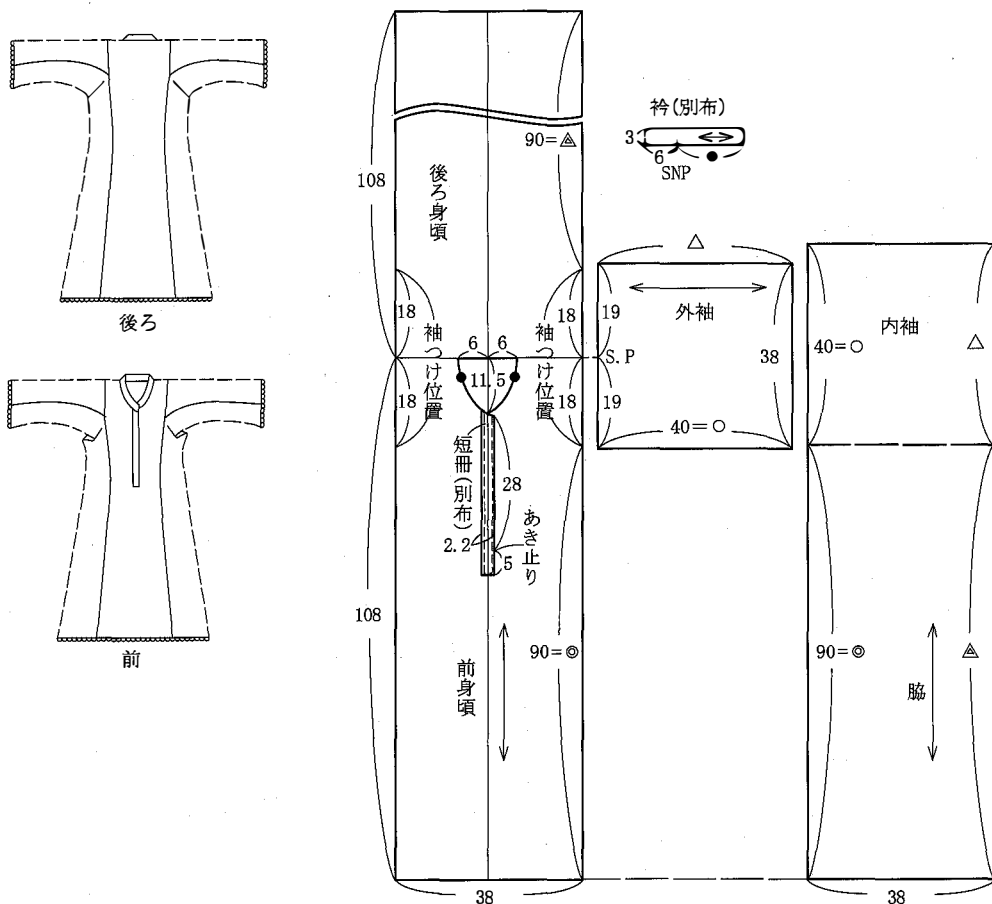
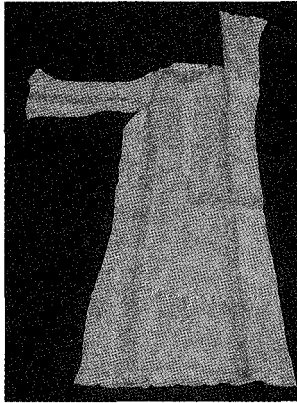
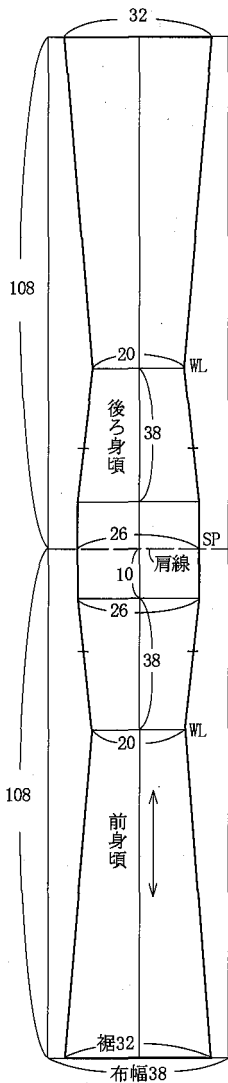


図7-1 トルコ, ギョムレクの作図



前（身頃脇と内袖-繋がり）

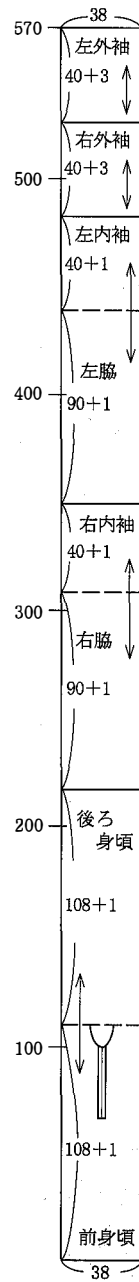
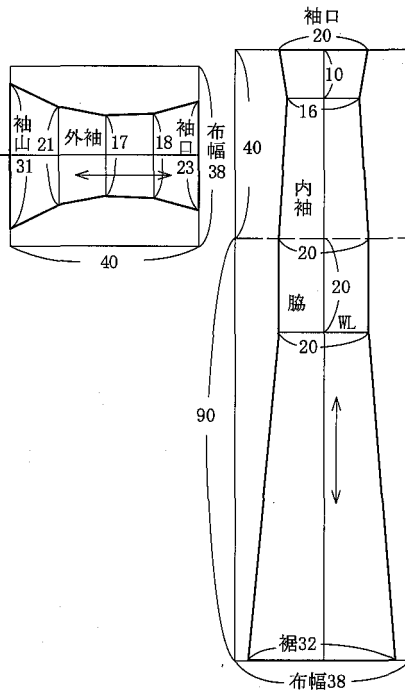


図7-2 トルコ、ギョムレクのプリーツ縮み寸法、裁ち合わせ図

表6 トルコ、ギョムレクの縫製

C	トルコ ブラウス ギョムレク	一手縫い（身頃、袖）ミシン縫い（袖山三つ折り縫い、衿）
		【布地にプリーツ加工が施され同時にシルエット出しが出来ている。耳端活用、拵活活用】 ・前立てつけ＝身頃前中心に切り込み上前、下前とも前立て布ではさみステッチミシンで止める。あき止まりは上下前立て布を重ねステッチミシンで止める。【手仕事は綺麗だがミシン縫いは慣れていないのかとても雑である。】 ・衿作り、衿つけ＝衿先にミシン縫いをし表に返す。衿で身頃をはさみステッチミシンで止める。 ・外袖つけ＝袖山を三つ折り縫い、身頃と袖山を巻き縫いで止める。 ・脇布、内袖つけ＝身頃から外袖と脇布から内袖を合わせ巻き縫いで止める。 ・袖口、裾＝オヤレースで装飾。

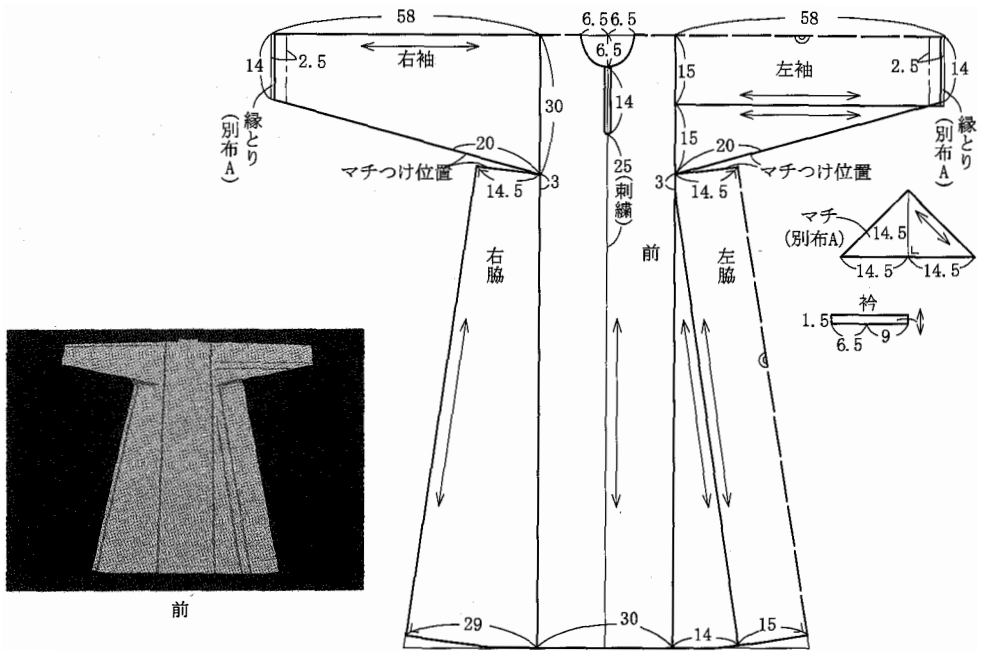
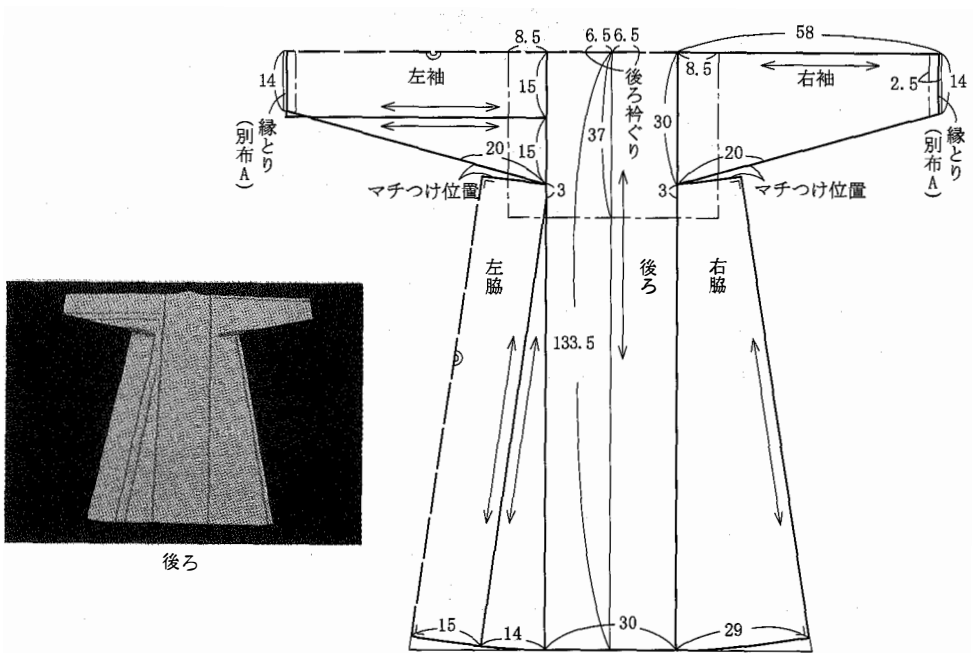


図 8-1 トルクメニスタン, コイネクの作図

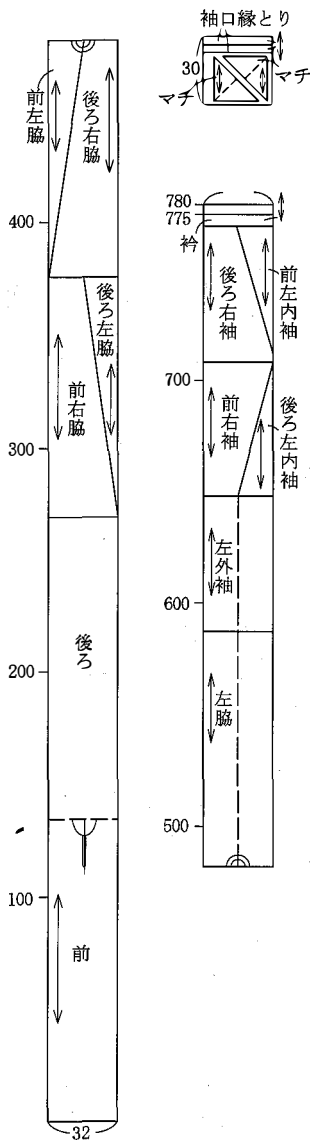


図8-2 トルクメニスタン、コイネクの裁ち合わせ図

15パーツからなる。前後身頃は肩線を輪にし一繋がりて裁断され、前右脇、前右袖は、切り替え線はなく1枚で、後ろ右脇、後ろ右袖も同様に1枚で裁断されている。左側は逆に前後脇布にも前後袖にも切り替え線がはいり長方形と三角形に分割される。右側の袖山線、脇線は縫い目となる。左側は逆に袖山線、脇線は輪になる。この分割の結果、パターン配置では右脇パターンと左脇の三角形パターン、右袖パターンと左袖三角形パターンがそれぞれセットされ長方形を構成し配置される。前後左袖山部分、前後左脇部分はそれぞれ丈分で裁断、布幅のたて2分の1の折山線に左袖山線、左脇線が通り輪で構成される。パターン配置の段階で単純なパズルのように三角布と台形布がセットになりブロックを作り、丈で区切られた。その結果、使用量の見積りは身頃丈の2倍、脇丈の3倍、袖丈の3倍、衿幅2倍となり、直線裁ちの和服の裁ち方に近い裁ち合わせ図になった。布幅は和服の標準幅36cmより狭い32cm幅である。使用量の算出も簡単にできる。32cm幅×780cmと細く長い。平面構成のドレスのため、腕を上挙しやすいうように袖下に三角形の襠がつけられ上挙への運動量を補っている。襠には黒無地の別布を使用してアクセントにもなっている。襠と同じ黒の布を使い袖口に縁とりの装飾が施されている。衿は1.5cmの幅の狭いスタンドカラーで、衿と衿周り前あき周りにダブルチェーン・ステッチで刺繍が刺されている。当て布まで通して刺す細かい針目での刺繍は、衿と前あきまわりに、厚みと張りを持たせ、型くずれを防ぎ、着装でつける大きな金属の飾りを支えることが出来るよう

表7 トルクメニスタン、コイネクの縫製

D	トルクメニスタン ドレス コイネク	—手縫い— 【耳端・ボーダー柄活用】 ・袖作り=右袖、袖山線耳どうし巻き縫い。左袖、外袖内袖との縫い合わせ耳どうし巻き縫い。 ・袖つけ、袖下縫い=袖山裁端を三つ折りにしまつる。袖山を身頃袖付け位置に合わせ巻き縫い。袖下襠付け位置まで並縫い。縫代は折り伏せ縫い。 ・脇布縫い=右脇布脇線耳どうし巻き縫い。左脇布接ぎ合せ位置耳どうし巻き縫い。 ・脇布つけ=脇布裁端を三つ折りにしまつる。脇布と身頃の耳を合わせ巻き縫い。 ・脇下襠つけ、袖口に縁とり=脇下に別布の襠をつける。袖口に別布見返しをつけ0.5の縁とり幅で整え縫い止める。見返し端はまつる。袖口から1.5に中綴じ。 ・当て布=胸肩背に木綿地の当て布をまつり止める。 ・裾=0.5幅に三つ折りまつる。 ・衿つけ=スタンドカラー(別布C)を身頃につける。裏衿(別布D)を整えまつる。 ・衿ぐり前中心あき周囲に刺繍=表布と当て布2枚を通してブレードをのせたようにライン状に細かいステッチで刺す。
---	-------------------------	--

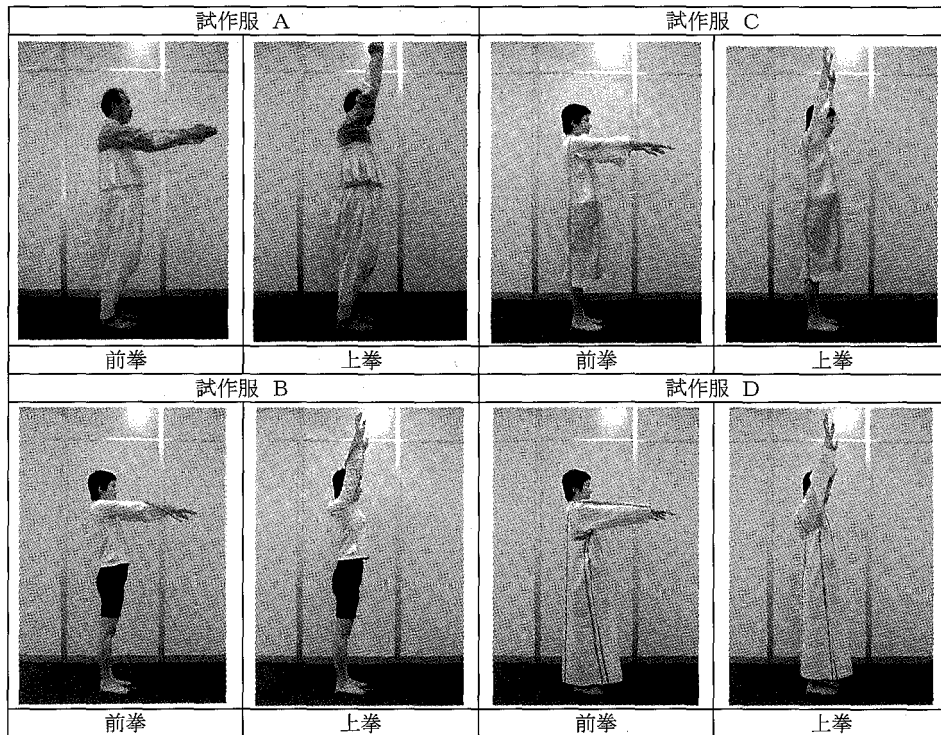


図9 試作服用による動作時の着装状態

丈夫さと保形性を考慮した方法で仕上げられている。縫製の詳細は表7に示す。

3 試作服による運動機能性の評価

試作服用による各動作時の着装状態を図9に示す。

1) 試作服A インド; 上衣, ケリヤ

袖ぐり, 胸幅に拘束感はあるが, 手の動きはスムーズで, 日常着用の上着より動きやすい。前拳での背幅, 上拳での脇下の抵抗感はあまり感じない。試作服の裾線は側挙での変化は見られないが, 前拳では前中心が上がり, 上拳では裾線は水平に上に持ち上がる。

2) 試作服B イラン; 上衣, ジレット

フィット性のある細身の袖だが袖下のあきが上拳による運動抵抗を逃がし, 拘束感はあるが手は無理なく上げることが出来る。上肢上拳では裾線はかなり上がる。

3) 試作服C トルコ; ブラウス, ギョムレク
体にややそっているが拘束感, 着用感を感じ

ない軽さである。試作服の重量142g(実物資料168g)であり, 被検者から, 着ていないような感じであるとの感想が得られ, 上肢の運動においても全く抵抗感なく, 衣服の形状からも動きは180度保証された。裾線への影響は殆ど見られない。

4) 試作服D トルクメニスタン; ドレス, コイネク

脇でのゆるみが原型寸法から更に5cm追加されたサイズになっているため, 身頃はゆったりしており, 静立時の着装感はゆるやかである。袖幅も60cmで拘束はない。脇下に高さ14.5cmの襷がはいり上肢を上挙しても裾への影響は殆どない。肩への負荷も少ない。

以上の結果, 資料4点共, 上肢側挙, 前拳, 上挙等の上肢運動は容易で, 日常要求される上肢の動きに合わせたカッティングの工夫がなされていることが明らかとなった。

IV ま と め

文化学園服飾博物館所蔵の実物資料，アジア4カ国の民族服を分析調査し以下の結果を得た。

① 素材

インドの上衣，ケリヤの素材は厚地の綿，他の3点は絹であった。衣服重量はインドの上衣，ケリヤは702gで重く，トルコのブラウス，ギョムレクは168gで最も軽い。

② パターン・裁ち合わせ

資料A C Dは布幅いっぱいを使用されている部位があったため，布地の幅を計測出来た。資料Bは得られた最大パターンから布幅を推測した。布幅は32cmから70cmに分布し，全く無駄のない，直線裁ちでの裁ち合わせはトルコのブラウス，ギョムレク，トルクメニスタンのドレス，コイネク，の2点に見られ，他の2点も無駄のない裁ち合わせであった。トルクメニスタンのドレス，コイネクは布を経済的に裁断するため，袖と身頃脇のパターンを分割する独特の方法が縞の配置を決めデザインを特徴づけている。

③ 縫製方法・装飾技法

インドの上衣，ケリヤは並縫いをし，縫い代は折り伏せてまつられている。トルコのブラウス，ギョムレクとトルクメニスタンのドレス，コイネクは，耳どうし巻き縫いで，縫い合わせている。装飾はスモッキング，縁とり，オヤレース，刺繍が見られた。

④ 運動機能性評価

調査資料は4点共水平袖であるため側挙は容易である。インドの上衣，ケリヤはフィットした袖形状ではあるが，三角襷と4cmものいせ分量による肘ぐせが充分とられているため，上肢の屈曲動作がし易く工夫されている。イランの上衣，ジレットは脇下のあきが運動抵抗を開放して，スムーズな上肢上挙を可能にしていた。トルコのブラウス，ギョムレクは身頃脇布から内袖の一繋りの形状が上挙の形状で上肢の動きは自由自在であった。トルクメニスタンのドレス，コイネクは脇下の三角形の襷が上挙への

運動を楽にし肩への負荷も少なくしていた。

以上4資料の調査結果より，民族服の素材，形状は気候風土，運動作業，生活様式に適合し工夫され定着してきたことが分かる。特に布地を無駄にしないパターンの工夫が全ての調査資料から確認出来た。平面構成の衣服はたっぷりのゆとりを持ち許容範囲の広いフリーサイズに出来ている上，襷をつけることで運動量を確保し機能性を高めている。資料4点は水平袖ですでに上肢は上げ易い。更に上挙し易いように，脇下に襷をつける，袖下を開口する，身頃脇布から内袖を繋げて上挙の形状で裁断する等，効果的で豊かな発想を感じる。民族服はデザインソースの宝庫であると再認識した。民族服の調査より学ぶものは多く興味深い。今回は上衣及びドレスの分析調査にとどまったが，資料数を増やし，下衣についても検討を重ねてゆきたい。

本研究の調査にご指導ご協力下さいました文化学園服飾博物館学芸室室長道明三保子教授，並びに学芸員吉村紅花氏に深く感謝申し上げます。また，被検者としてご協力下さいました木川正司氏，被検者および資料作成でもご助力頂きました八巻香苗氏に深く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 柴村恵子，榊原弥生：東南アジアにおける民族服の研究（第7報）—北部タイ山地民族 カレン族の生活習俗と衣裳—，名古屋女子大学紀要35，61～72，（1989）
- 2) 柴村恵子：東南アジアにおける民族服の研究（第8報）—北部タイ山地民族 ラワ族の生活習俗と衣裳—，名古屋女子大学紀要37，85～95，（1991）
- 3) 坂上ちえ子：インドネシアの民族服飾—ジョクジャカルタ及びスラカルタの服飾について—，鹿児島県立短期大学研究年報21，61～73（1993）
- 4) 城所綾子：ブータンの民族服飾を訪ねて—被服構成上からの一考察—，山脇学園短期大学紀要35，63～78（1997）
- 5) 道家とき，堀てる代，旗美代子，佐野侑子：民族衣装（岐阜市歴史博物館所蔵資料による）—アジアの衣装の構成について—，日本衣服学会誌42（2），51～58（1999）

- 6) 中屋典子, 高橋良子, 横堀秀子, 柴田早苗, 小出
恵: 民族服の裁ち合わせについて—デザインと布幅
一, 世界の伝統服飾, 文化出版局132~137 (2001)
- 7) 田村照子, 山本顕子: 民族服の気候適応性に関す
る実験的研究—東南アジアの民族衣装を中心とし
て—, 世界の伝統服飾, 文化出版局, 138~141 (2001)
- 8) 小川安朗: 世界民族服飾集成, 文化出版局 (1991)
- 9) 世界気候表1961~1990: 気候・降水量/気象庁編集,
東京, 日本気象協会 (1994)